

私は、オオゴマダラのターン。

いつもは、かいき島に住んでいる。でも、わけがあって、のとく島につれてこられた。私は、体が大きくて、人の話によると、とてもきれいなようだ。のとく島には、私の仲間が住んでいないので、今回どうしても、その美しいすがたを見せたいと言う人がいて、無理に連れてこられた。

最初は、みんながやさしくしてくれて、私がたいくつしないようにしてくれたけど、だんだん私は、つまらなくなってきた。いくらやさしくしてもらっても、仲間ではない。けんかをして、やっぱり仲間とすごす方が楽しい。

そこで私は、一大決心をした。三百キロメートルの海をわたって、かいき島に行き、仲間に出会うことにしたのだ。

私は、のとく島のみんながねている真夜中に、それを実行した。

初めのうちは、みんなに会えるうれしさでつかれなくて、ずいぶん遠くまで飛ぶことができた。やっと、島のはずれについて、いよいよこれから海をわたるという時、とつ然、高い波がおそってきた。

私は、あぶなく波にのまれるところだった。私の羽は、少しの水ははじくようになっていて、あんな大波にのまれてしまえば、一息にやぶれてしまう。それにこれから先は、休むところは見つからないかもしれない。喜んで飛び出してきたけど、自分のしたことを少し後かいした。でも、もうかいき島を目指して飛び続けることにした。

今日で四日目、海の旅は思ったよりつらかった。と中、何度も落ちそうになりながら飛び続けた。つかれたら、海にういているものの上で休んだ。それにしても、海にういているものはたくさんある。空きカン、ペットボトル、紙ぶくろ、スリッパなどゴミがたくさんだ。おかげで私はたくさん休むことができたけど、魚たちは、こんなきたない海をみてどう思っているか聞いてみたくなった。

すると、目の前にトビウオが飛んできた。

「トビウオさん、このゴミを見てどう思う。」

私が聞くと、トビウオは、

「ターンさん、君は海の上だけを見ているけど、海の中もすごいよ。ぼくは、こうして時々、きたない海の中から外に飛び出せるけど、他の魚は病気になったのもたくさんいるんだよ。」

と、答えてくれた。

「へえ。海の世界もたいへんなんだな。」

と、私は思った。

空の旅を続けていると、と中、イルカさんに出会った。あんまり私がふらふら飛んでいるので、かわいそうに思って声をかけてくれたそうだ。

「ターンさん。そんなにふらふらして、どこに行くの。私が、背中を貸してあげましょうか。」

「ありがとう。イルカさん。私は、わけがあつてのとく島にいたのですが、やっぱりかいき島に帰りたくなくて、こうして無理して海をわたっているんです。」と、答えると、さっそくイルカさんの背中に乗せてもらうことにした。

イルカさんは、とても速くて、私が三日かかったきょりを一日で泳いでくれた。おなかがすいてふらふらだったので、花のみつがあるところにもつれていってくれた。と中で、いろいろな話を聞かせてもらった。

最近、海があたたかくなって、あついところに住んでいた魚さんたちがやってきて、自分たちのエサが少なくなってきたこと。オニヒトデがふえて、サンゴがへってきたことなどだ。そこで私も、かいき島のことについて話をした。

緑は残っているけど、道のみえないところには、空きカンや紙ぶくろがたくさん落ちていること。家がたくさんたつて、緑がだんだんへっていること。車がふえて、空気がよごれていることなどだ。

そしておたがいに、昔のきれいな空や海がもどってくれることを願った。

イルカさんと過ごして三日目、目的のかいき島に着いた。今日でイルカさんとお別れだ。最後に自分の名前は、「ルー。」だと教えてくれた。ルーさんは時々、かいき島にも遊びに来てくれると約束してくれた。二人は、元気よく手をふって別れた。

さぁ、なつかしい仲間たちの住む場所に出発だ。みんなは、覚えていてくれるかな。二十分後、久しぶりに私に会えた仲間たちは、とても喜んでくれた。長くつらい旅だったけど、と中であきらめずに最後までたどりつけてよかった。やっぱり仲間たちとすごすのが一番だ。